

## フリードリヒ・デーメル

### ヴェルツブルクにおけるクライスト

今 田 淳

不安と動揺を心のともとした作家ハインリヒ・フォン・クライストは、1800年の秋、ヴェルツブルクで終る南ドイツへの旅に出た。この旅の目的は、物好きな崇拜者や生真面目な思索家達が努力を重ねてきたが、今日までのところ未だ明らかにされてはいない。

クライスト自身、ヴェルツブルクでの諸々の体験をヴェールに包んで妙に不可解にしているのである。婚約者ヴィルヘルミーネに宛てた数通の手紙も、熱い恋心と楽しい未来への希望との絢交のうちに、若い心の自負と血潮の高鳴りとを漏らしているにすぎず、彼の心の激しい興奮と満足の原因については何も語ってはいない。クライストは当時、ぱっくりと口をあけた心の冷い隙間を、南の暖かい色彩豊かな光景でうめるべく北を出発したのであった。自分のような気質と人生の課題を背負った人間にとっては、自由のある生活を送るのがよいのか、それとも或辛い職務に献身しながら、自分を押し潰しかねない抑圧に抗って生きるのがよいのかという問に、彼は自虐的ともいえる態度で久しく係ってきたのであった。

彼は、どうしても決心がつかなかったし洞察力も硬直するばかりだったので、運を天にまかせて遠くへ行ってみようとしたのである、そうすれば無限の彼方にはっきりした輪郭のある自分の姿が、茫漠とした地平線の前に鋭く刻まれた自らの顔が浮かんでくるかもしれないと思って。というのも、彼には自分が未だ本物でもなければ、しっかり鍛錬されてもいないとわかっていたからである。

互に助け合いながら美しい風景に英気を養い、見聞を広めつゝ人間を知ること学ぼうと、連出って出発した作家とその友プロクセスとは、目新しいもの

がつきつける印象に対して初のうちはなかなか打解けなかった。特にクライストは頑に無関心を装っているようだった。朝駅通馬車に乗込み、摩切れたクッションに身をもたせ、両足を窮屈そうに伸ばし、街道をがたがた揺られる苦痛に耐えているような時には、彼の心は硬直痙攣に襲われた状態といえた。じつと視線を据えて移りゆく外界を受入れるというようなことは殆どなかった。マイン河の谷間に入り、睡気を誘うような河の流れがいくつもの丘の起伏と交錯し、生温い外気と熟れゆく葡萄の匂を含んだ微風とが彼のこめかみを掠める頃になってやっと、彼は少し活気をおび楽しそうに外に目を向け、いつものようにカントの哲学とか、真理と本質を究明しようとする執拗なまでの精神の欲求とかについてではなく、崩壊してゆく小さな自由市や黄色く色づいた麦畑やらを話題にあれこれ喋るようになり、風景が綾なす旋律的な線をその指で何度かなぞったりもした。

ようやくヴェルツブルクに着き、階段の上り下りを重ねてたつぷりと宿を探しまわり、おかげで手足の凝もなくなって、また二人ともが心地よくて、高い窓にめぐまれ光がよくさす部屋を見つけたところで、彼等は先ず、自分達の旅の目的である仕事にじっくりと取掛かることにした。クライストはある著名な医学の大家に助言を求めるつもりであったし — 危険ではないまでも長びいているある肉体的欠陥が彼の不安と劣等感の原因となっていたのである — 友人の方はマルク（プランデンブルク）の貴族達からフランケンの貴族へと委託されたいくつかの任務を片付けてしまわなければならなかったのである。

ヴェルツブルクに着いてから暫くは、クライストは次から次に現れる新しい事象に無条件に夢中になる気にはなれなかった。彼は頑に自分の殻に閉籠り、やたらと穿鑿し、人や事物を取巻いている秋の黄金色の光に不信げに視線を投げていた。つまり彼は自分の分別くさきを守って、他の連中が盲目的に受入れる事柄を、冷静に距離を保ちながら吟味しているつもりであった。彼は亦、あまりにも自分の苦悩とか心痛にかまけすぎていて、憚りもなく迷妄もすてて異郷の魅力を堪能するという気分にはなれなかったのである。

そのうちに彼は、プロックスを通じて或伯爵の招待を受けたが、この人は、王宮のすぐ近くにある小さな避暑用のファイツヘヒハイム城で、領主司教の管財人をしているのだった。或日の午後二人は歩いてそこへ出かけていった。マリーエンブルクの重厚な稜堡を背に、眼前には流れに沿った草原と牧草地、左右に黄色く色付いた葉と灰色の土が彩る葡萄の丘、その中を魔法の世界を彷彿させながらまるで道標のようにのろろ流れているマイン河が見えるところま

できて、二人は今一度適当な場所で振返って町を見つめた。町は見事な装飾や浮彫模様のある石とで飾られ、煌びやかな彫刻を鏤めた聖骨箱のような姿で、バラ色に輝きながら盆地に身を横たえていた。銀色の靄が家々の屋根や緑青のふいた円蓋の上にのぼっていた。いくつもの塔の尖端が陽光を浴びた大気の中で幽かに跳びはねているかのようで、僅かばかりの愛嬌と溢れんばかりの華麗さとが交錯して変化のある調和をなしていた。町の外郭は、重厚かつ厳かにメイン左岸の絶壁に聳えたつ広壮なマリーエンブルクの影の中で小刻みに震えていた。

クライストが頑固に抗がいながらも秘かに驚嘆したまま無口でいたのに対して、友人の口からは思わず知らず感嘆の叫声が洩れるのであった。やがて彼等は危っかしい旧水路と草の生茂った土手の間を畝々と伸びている一本の小道に曲り込んだが、自分達がちゃんと目的地に向かって進んでいるのか半不安だった。草籠を背負い背を丸めて歩いている皺くちやの農婦が彼等に会って、道はツェル修道院の傍をぬけ右に左に曲がりながらファイツヘヒハイムに通じている、と二人に教えてくれた。それで彼等は安心し、ゆっくりと土竜の盛土や麝香草の葉枕に足をとられながら進んでいった。クライストは腐泥化して光沢を放っているのに誘われて、柳の木の空洞にある軟かいピロード状のものに手を触れたりもしたが、彼によれば梟や他の夜鳥がそこに巣を作っているかもしれないというのであった。二人が未だ人里離れた村外れにいてと思っているうちに、壁で囲まれていて、いくつかの靈妙な洞室と軽妙な園亭を鬱蒼と繁った葉が隠している庭園の真中に、地から生出たように、お城の隆々としたスレート屋根が突如として姿を現したのであった。

領主司教の管財人は二人の客を親しくかつ威厳を失わずに出迎えた。彼はすらりとした中背で活力に充ちていた。顔は身体つきからすれば肉付がよいといえた。目鼻だちは均斉がとれて控目な感じで、彫がきれいで温和だったが、柔弱な感じはなかった。額と頬のあたりには皺が無数にあって、ぎしぎしと音をたてているようだった。耳は小さく、いい形をしていたし、手の節々は整って堅く引締っていた。その人となりは城と庭とに漂っている妙なる調に充ちているようだった。年令を超越し、若々しいともいえる優雅さに溢れて、上品で透明なワインのようであり暖かい火のようであった。

クライストは清澄なこの人の顔に我身をてらしてみても、反抗と動揺に煮立つ火山さながらの自分の若さを恥入るような気持になった。かくも調和のとれた人に対して嘲笑と防衛の気持が同時に彼の心中に頭を擡げたのも事実だった

が。彼は円熟し中庸を得た人間であるよりはむしろ、荒削でごつごつしていたかった。彼の本性に巣くっていた巨大なものが、人間として成熟したこの人を面の当にして、それを賛美しながらも反抗的にむくむくと脹らんできた。彼は田園風景の中を歩いてきて気分も解れていたのだが、突如として殻に閉籠り無口になった。

挨拶を交し、紹介をすませると、主人は客を庭園へと案内した。「建物の中の御案内はおいおいさせていただくことにしまして、まずは私どもと、と申しますのは娘と私の事ですが、午後の一時席を共にして少しく四方山話でもしていただきましょう」。

かくして彼等はお城の明放たれた園亭の広間を横切り、幅の広い側廊の階段を下りて、撫と楡の樹々が緑色に泡立っている日の光の中にやってきた。敷詰めた小石を踏んで踵が軋み、壁がわりの木の葉は微かに息吹いていた。唐草模様で飾られた数匹の竜とグリフィンに守られて、半裸の大理石の女神が数体、傍を通ってゆく彼等に微笑みかけていた。そこへ、すらっとした少女が彼等を出迎えにきた。その少女は、彫刻家の手で石に刻まれていたのが、皆の徒然を快活な気分を追払うべく今や生気をえ、自分の坐っていた台座から降りてきた牧女かと思われた。この少女が伯爵の20才になる娘で、おおらかに客を歓迎し、一同をコーヒーへと招いたが、そのテーブルは人目につかない場所に優雅に構えられた園亭の中に仕度してあった。彼等が金色に調色された円い園亭に入って席につくと — この時クライストは、空気調節用に造作された鍍戸の斜めになった隙間から差込んでくる日光の真下に坐ることになった — 給仕役の少女が香のよいコーヒーをカップに注いだ。象牙色の器は絹地の黄色いテーブル掛と溶合って、外の菩提樹の葉影が風に揺られて幻想的にその上を掠めると、聞こえるか聞こえないほどにりんりと鳴るのだった。クライストは小さないくつもの磁器で編んだ網の中に捕えられた一匹の蝶のようだった。彼は殆ど身じろぎもしないで梢の息吹に、他の人達の会話にじっと耳を傾けていた。ヘルタは、これが主の娘の名前だったのだが、プロックスと父との間で交されている気の張らない話に、熱心にお茶目まじりの大胆さで加わっていた。伯爵はフリードリヒ大王存命中かなり長い間ベルリンとポツダムにいたので、プロイセンに関する新しい事情やその成行についての情報を好んで聞いていた。彼は政治や文化について判断を下すのに沈着で卓越していたし、使う言葉も才気煥発で洗練されていた。顔と声とは全く落ち着いていたし、心は自足そのものであった。彼は人間を幽かなイロニーをこめて観察していたが褒貶は差控えていた。そう

いうわけで、彼の考えに歩調を合せるのは、それが円熟し一目瞭然の温かさにつつまれていたので心地良かったのだった。

クライストは内心飽き飽きし、同時に苛立たしくなってきた。彼は時々ヘルタに探るような視線をなげた。彼女は給仕と会話に夢中で彼のことは殆ど気にかけていないようだった。それでも彼女は圧倒的な未知の力という風情でそこに居たし、彼の血はそれに触れて燃立っていた。彼女の顔立は父に比べて力感に溢れ、肉感的であり、引縮まっていたきつい気が彼にはした。彼女は自然のまゝで野生っぽく、依然として動物の乳と植物の液汁を糧としているかのようだった。生出す力が彼女には具っているみたいであり、彼女の肉体からは抑制されながらも発露の機会を待っている情熱が進っていた、剣咀でありながら肥沃で、芽生こうとする苛立ちに充ちて激しく開拓の手を急立てている処女地さながらに。

クライストはヘルタの近くにおいて、心の糸が震えるのを感じ、彼女の存在に我を失っていた。気が付いてみると彼は、彼女の名前が持つ響きと意味とを子供っぽくじっと考えていたりした：リューゲン島で聞いた異教徒の金髪の女神も同じ名前ではなかったらうか？呪縛から逃れようと心を決めて、彼は猛然として会話に加わっていった。

「プロイセン気質についての貴方のお言葉に申し上げたいことがあります。貴方は、無比王フリードリヒがこの儉しさを旨とするプロイセン流儀の創始者だと仰いました、しかし伯爵、それは必ずしもそうではないと思うのです。大王はあまりにも楽人かつ文人にすぎて、謹厳な職務遂行を唯一正当な戒律であると賞揚なさるお気持にはなれませんでした。大王は気さくで剛毅、柔軟で洗練された方でした。あの方は“こちこちのプロイセン人”という枠には嵌められない方でした、もしかしたらすでに将来いわれる意味でのドイツ人だったかもしれせん。あの方の父君、あの永遠の曹長、が正真正銘の蛮人であったことは確かですが。ところで私達は、プロイセン的精神がドイツ騎士修道会の禁欲的な戒律、目的のためには過酷な自己犠牲も厭わない姿勢から育ててきたということを忘れてはいません。北方ドイツの無限に広がる平地にあって、国家とは界標を定めて線引をすること以外の何でありましょうか？絶えず自己脱却を繰返しながら、森と畑と雲しかない単調極無いところに輪郭の定かな姿を作り出し、それを際立たせることしかないではありませんか！これがプロイセン魂なんですよ！なぜなら、個人が自己を否定し全体に奉仕してのみ、遙彼方、際限なく遠くに浮かぶ地平線の前に形と度量が生まれるのですから。」

伯爵は呆れてクライストの言葉に耳を傾けていたが、訝るような表情をみせた。

「それでは貴方は、私が些か条件付で崇敬しているフリードリヒ大王に、プロイセン人の権化以上のものを御覧になるのですか？」

「ドイツ民族は、ロスバッハでの対仏戦勝利以来大王を主君と認めてきました。」

「ですが彼は神聖ローマ帝国を瓦解せしめました。」

「神聖ローマ帝国は死滅したのです。大王は新しい神聖帝国を築くために皇帝にならなければなりませんでした。」

「私は南ドイツの人間です。私達の地方では、あちらの植民地的な北東の地域では死滅したように見える多くの事が未だ生きています。オーストリアの精神も未だ必要ですし、そういう貴族階級も依然としてあるのです。誰が今日ラインを守るというのです？オーストリア人じゃありませんか！停戦ラインの背後に撤退してしまうのは誰です？プロイセン人ですよ！何よりも、ドイツ人というのは一つの概念に定義出来るものではないのです。ヨーロッパで自由に活動し、世界へと流れ出てゆくのです。」

クライストは腹が立ってきた。「どんな世界にです？人類とでもいうんですか？笑止千万ですね！私達がドイツ人になろうではありませんか、そうすれば私達はそれこそ申分のない人間になるでしょうに！」

伯爵は微笑んだ。「貴方は或事を信じ、それに奉じる方ですね。好きになりましたよ、フォン・クライストさん。貴方は私を誤解なさった、というより私が無責任な認識を並べ立てすぎたのかもしれませんが。私の話の発端は、私達の民族の醒めた精神をかきたて、決断しろと呼びかけているあの思想だったのです、プロイセンの精神かオーストリアの精神かは二の次にしまして。ドイツの中部に生きる者としまして — このマイン河の谷間一帯は中部地方のそのまた真中ですから — 私なりに、北だ南だと罵り合わずに、全体を統合するものを見付けようと思ったのです。ドイツを旗印として！私は今でもそれを探しています。」

クライストの甲高い声がそれに応えた。

「わかっております、私はこの身で体験しました。が、私はプロイセン士官の一門の出です。フリードリヒ大王の徳なしには、修道の精神なしにはこの地上に帝国など存在しないのです。更に苦痛と怒りにまみれ、抗いを重ねて知ったのですが、音楽と創造的自由なくして私達の心を統一するドイツ国家なるもの

は生れてこないのです！北も南も、総てを抱括するものことですが。」

伯爵は客の手を嬉しそうに握った。

「そうです、総てを抱括するものです！ですが、成ろうとするもの、それを何も彼も意識するには及ばないのだということを、どうか忘れないで下さい。あなた方北部の方はあまりにも意識にこだわり過ぎます、私達中部及び南部の者は、もっと自由に振舞いますし、意志の力に従うよりも神の加護に身を委ねようとするのです。」

クライストは幽かに頷いた。彼には未だ、述べられたことの意味の深さと重大さがわかってはいなかったのである。彼はこのような認識にドイツの悲劇性の一つがあるような気がして、肯定してよいものか、それとも別の見解を持出した方がよいのかためらった。しかしこの未解決の話題は魅力があったので、とりあえず沈黙することにした。彼が突如として議論に加わって以来、じっと彼に注がれていたヘルタの視線に狼狽させられたこともあったが。するとその時、心の奥底から脈動が伝わってきたような気がした。彼は深く息をつくとき、不意に、黙ったまゝ、隣りに坐っている美しい娘をじっと見つめた。彼女は頬を赤らめて笑った。

「私の理解が正しければ、お父様とフォン・クライストさんは、お二人とも同じことをお望みです。要するに愛する人であろうということです。そしてドイツという国が愛される女性なのです、違いますか、フォン・クライストさん？」

クライストは複雑な気分で頷いた。「ですが、私達は夜と霧を突切らなければなりません、簡単ではないのです、私達は成ろうとしている者なのです。」

今度はヘルタの声は非常に陽気に、鐘のように朗らかに響いた。「お馬鹿さんですね、あなた方殿方は！だって、あなた方が仰ってるドイツ国はいつだって女性の中に存在していますのに。そこには南も北もありません、プロイセン的行状もオーストリア的行状もないのです。私達は — 生意気を言ってすみません、私は自分のことを言うのではありません、女性全般について言ってるのです — 私達は大地です — あなた方が懂れている果実なのです。そして、私達女性という居心地良いドイツ国からあなた方は逃れることは出来ないのです。さあ、馬鹿なことを言ったとどうぞお笑いになって下さい。でも私は、気が向くまゝ浅はかに一人前の女性のような口を利きましたが、後悔はしていません。」

三人の男性は当惑し、押黙っていた。暫くして伯爵が口を開き、娘が喋ったことはおよそ問題にはならないような感じがするが、それでも或種の時代を超

えた真理がその中には含まれているようだ、と言った。クライストは再び自分の殻に閉籠った。ヘルタの発言が彼に衝撃を与えたのである。彼はこういう見解は、思考の産物というよりはむしろ本能に発したものだと感じた、がそれでいて機知にも富んでいるし、意識的に気負った面もあると思った。この娘は、血気と才気とが自らのうちで出合って雷雨を喚起し、この世を薄暗がり包込んでしまう、そんな性質なのだろうか？なんて不思議で、人の心をそその女性なんだろう！無意識のうちに意識されている挙措、それは自ら解け、その後で再び神秘的で不可解になる謎みたいだ！清澄な泉が黒々とした岩間から湧出で、一瞬ありとあらゆる天体、大地と太陽と人間をもその鏡に映し、再び滲んで源へと消えていくのと同じだ。暫し会話がとぎれた。それが再び甦ったところで、一同は話題を軽いものに変えた。

伯爵は自分の園芸趣味、花卉栽培、またそこで生じる思いがけない不思議について話した。彼は植物の生長が月の盈欠に依存していると述べて皆の注意をひいた。彼の説によれば水脈もいろいろ磁気を発していて、そのために成育が止んで色褪せてしまうので、地下の水脈上の若木を移植しなければならないこともよくあったという。落雷の危険に曝された樹木に寄生している宿木は、全く不思議な植物で稲妻を断つ力があり、樫の葉は人間の生氣と信頼を昂揚し、それで狩人や戦士は帽子や兜に樫の葉を差込んでいるというのであった。二人の客はこの迷信がかった知恵を訝りながらも一応儀礼として承っておいた。彼らは、宇宙空間に起るいろいろな現象について一般論や気の張らない意見を交換するのがよさそうな気がしたが、肩を竦めると、話題をもっと身近なことに転じて、細長い花壇に咲いていて淡い色の園亭の周囲を濃い色彩で縁どっている藍菊の硬そうな花冠とか、向日葵の真黄色な頭状花などにふれることにした。というのも、一同はコーヒーを飲みおえて園亭の外へ出たのである。クライストはヘルタと並んで小道を歩いていたが、その道は企まらずして中庭の深い陰の方に通じているのだった。時折彼らの眼の前に人目を忍ぶように草地が見えることがあった。草は既に萎びて疎になっていた。けれどもそれだけ一層妬まじげに、庭園の真中に頽れているブロンズの鹿に矢を向けて、茂みからすらっとした肢体を見せているディアナの腰のあたりで、太陽の光がきらきら輝いていた。それから男達はこじんまりした野外劇場を見物したが、書割をなしている木の葉には手虫が纏わりついて、あたり一面食散らし、風にふれると満腹した毛だらけの体で生命のある木の葉の壁から落ちていくのであった。

作家は、自分が呪文で日常の喧噪から夢の園に送込まれたのかと思った。木



の葉の壁と木蔭の壁掛の背後のどこかに新しい世紀が広がっていて、その希望と虚栄に沸立つ大海原に昨日は彼はまだ飛込んでいこうとしていた。しかし今は、幸福な人々の住む島に漂着しこの上ない幸せを味っていた。傍にいる少女は悠然としていた。彼女には特徴として彼が挙げうるようなことは殆どなかった。その姿、その声さえもが改めて説明を要するものとは思えなかった。彼女はこの幸福な楽園が生み出す響と色と旋律みたいなものだった。

それにしても彼は、少し前には彼女のことを全くもって測り知れない、謎のような人と思っていたのではなかったのか？その彼女が今はまるで運命の支配を受けぬ人のように彼の傍を歩いていた。これは錯覚だったのか？

彼は黙想の楽しみを素気ない質問をして台無しにしてしまった。

「貴方はこの地で、無益な彫像と人工の生垣、唐草模様のがらくたに囲まれて、こんな風にずっと生きてゆけるのですか？」

ヘルタは驚いて彼を見た「貴方は遊びを咎立てするのですね。随分厳格で堅苦しく育てられたのですね、フォン・クライストさん。」

彼は狼狽して応えた「遊びですって!？ 確かに私は謹厳・厳格な雰囲気です。」

「それで貴方は今、不信感がかかって気楽に夢想することが出来ないのですね。」

「私達は目的に向かって前進していくようにと教えられてきました。」

「いいでしょう。でもどうして私達が無意味で皮相なことや外見の美しさといったものを楽しんではいけないというのですか？」

「それは意識を鈍らせ、無気力にし……」

「まあ、貴方はやっきになって抗弁してますけど、まるで或事を徹底的に否定しながら、其の実それに怯えている人みたいですね。」

嘲弄するかのような微笑がヘルタの口元にふっと浮んだ。彼女は歩調を速め、懶げに半獣半神の体を台座の上に伸ばしているスフィンクス像の前で立止った。斜に射してくる陽光が砂岩の像を取巻いてきらきら輝いていた。獅子身の部分はゆったりと臥していて、前足だけがびくびく動いて見えた。だがこの想像上の生物の上半身には、葉柄の上に咲いている花のように魅惑的で優美に愛らしく、裸婦の胸と首と頭とがあった。ヘルタは戯けて指をスフィンクスの唇に押当てた。この一瞬ヘルタの顔は石像の顔にとっても似てみえた。

「名匠フェルディナント・ディーツがこの像を彫刻したのです。彼は晴朗の彫刻家でした。自分の芸術作品を野外に据え、その最後の言葉を光と陰に委ねました。雨が女神の肩に触れて快樂を味わい、苔がそのこめかみと頬の笑窪を栖

にしています。こんなにも信頼して自然と付合うって素晴らしいことではありませんか？何時かはその作品が自然に破壊されるとしても、それは音もなく優雅に為されるでしょうし、名匠は天国でその様子を見て微笑んでいるのではないのでしょうか。」

クライストは応えなかった。彼の目は熱くせつなくヘルタの顔に吸いつけられていた。彼は二人の女性が溶合って一体になっていくような気がした、生きて自分の傍にいる女性と伝説上の危険な女性とが。もしかしたら彼女達は同じ匠の手で彫られ、姉妹として有為転変のこの世界に据えられたのだろうか？そして自分はといえば — 自分は偏窟で愚鈍で盲目すぎて、余計なこと — 無目的なことにはやつきになって抗ってきたのだった。彼は恥入って、先に述べたことを訂正して、芸術が官能に及ばず高尚な陶醉が人間の意識性を止揚するということを認めるつもりになっていたが、その時新たな衝撃が彼を襲った。

「いらっしゃい、フォン・クライストさん。貴方のお気持ちを満たしてあげましょう。私は決して贅沢な淑女なんかではありません、貴方はひよっとしたら幾分軽蔑しながら想像なさったかもしれませんが。旧政体好みの蓮葉な遊びはお仕舞です、それにこの晴天を徒にすることもないですしね。向うの壁の上に瓦屋根が見えますね？あれが私達の農場なのです。父は経営には最善を尽していますし、母が亡くなってからは私も父を手伝うようにしているのです。貴方をあそこにお連れしたいのですが。」

こうして二人は裏門を通して大きな農場にやってきた。そこには方形になって住家と家畜小屋と納屋とが建っていた。丁度そこへ、粹付の荷車が二番刈の牧草を積んで、梁に獣帯記号を刻込まれた幅の広い門から入ってきた。中庭には堆肥が入念に積重ねられていた。その堆肥を鶏がくっくと鳴きながら搔寄せていたが、そのあたりからは僅かに湯気が立っていた。納屋は巨大なホールさながらに開いていた。脱穀場の上では日光が踊っていて、穀物積場ではぎっしり積まれた小麦の束が、脱穀の手がかかるのをじっと待っていた。

「何でしたら、あなたには明日から刈草を納屋にしまうのを手伝っていただいてもいいのですよ、天気は続きそうですしね。」

ヘルタは全く事務的な、序にという口調でそれを言った。彼女が突然自分にあなた (Ihr) という言葉を使ったのでクライストは吃驚したが、その表現はこの辺の田舎の雰囲気にぴったりだったし、彼の気に入った。

「宜しければ可愛い家畜でも見ましようか」と低い建物に向いながら彼女は続けた。

「私達の服を見たら家畜が驚くでしょう。こんな恰好で歩き回るなんて可笑しいですものね。ここで一緒にお仕事する気がおありなら、あなたも田舎風な服装にしませんとね。」

好意からとはいえ自分の時間がこういう風は無造作に決められたことが、クライストの癪にさわった。彼は自分を案内するヘルタの後から黙って足音も荒くついていったが、家畜小屋の丸天井の下に足を踏入れた時には、思わず身を屈めてしまった。彼に向って騰々たる蒸気が吹きつけてきて、乳と糞尿と干草との入雑った臭がした。家畜から発散された熱が温かくしっとり肌と肌伝わってきた。首の鎖がかちゃかちゃ音をたて、鼻孔には鼻嵐が吹いていた。嚙潰し反芻する懶げな音があたり一面にあった。牛の濡れた大きな目が二人の方を向いて、じっとばかり動かなかった。今まで農作業など殆どしたことがなかったこの見物人は、途方にくれてぼんやりとその生物の前に立っていた。太古の神々しい息吹が彼の感官を吹貫けていくような気がした。かつて衣類を纏っていなかった人間は、かのゼウスさえもが姿を変えたがったこの聖なる動物の傍にいて、その体熱にくるまれていたのではなかったか？そして今、驚いた牛の唸声は伝説の角笛の響のように聞えていないだろうか？滑らかな口がいくつも、ゆっくりと大きく開いて、低くうなっている奥の方、胸と腹と草のおいがする臓器とから、飽食した大儀そうな音を吐出していた。いかにもどっしりと牛が起上がった。その中の数頭が飼料棚に首を伸ばし、選別するように乾いた草に息を吹きかけ、口の縁から緑がかった汁と涎を垂らしながら悠々とむしって食べ始めた。喉袋が幽かに揺れ、頸が伸縮し、二つに割れた蹄は濡れた敷藁にめりこんでいた。時々頭が石の水かいおけに沈み、黄色い角が横木の枠にぶつかっていた。

「乳を搾ったり餌をやったりする時は、小屋全体が大騒になります。農婦達は木靴を履いて、がたがた音をたてながら一頭々々に餌をやり宥めていきます。ここには牝牛だけをおいてまして、あそこの隅に子を孕んだのがいます。ところで貴方は子牛が生まれるのに立合ったことがありますか？手を貸してやったかという意味ですけれど。まるで拷問をうけているみたいで、じっと見てはいられませんものね。動物が子を生む時に苦しむ様子は神聖なものですから。」

クライストは頭をふった。

「私は士官でしたし、町で育ちました。遺憾ながら私の一門はそういう本源的な事からは疾うに疎遠になっています。私達が学んだのは官吏として国家に奉仕する事でした。」

「私の方は搾乳と牛乳室の管理を習いました。笑ってはいけませんよ！農婦の仕事、つまり家畜小屋の世話と家事とは、主の娘たるもの同じ様に、いえ彼女達以上に出来ないといけないのです、あの人達より分別と品位がないといけないのですから。違いますか？ それとも私、専ら青白き上流婦人といった風情で庭園を散歩し、音楽を嗜み、ジャン・パウルでも読んでいた方がいいのでしょうか？」

「いいえ、今のまゝのあなたでいいんです、ヘルタ。私はさっきは不躰で思いついていました。一体この私はどんな技芸を身に付けているというんでしょうか？不自然で偏頗な職業しか知らないのです！そのくせ差出がましく教訓を垂れているのですからね。どうかお気を悪くなさらないで下さい！」

「とんでもありません。でもそろそろあちらに戻らなければ。こういう事ですから、あなたがもしもお百姓仕事で気晴が出来るとお考えでしたら、私明日か明後日にも、農場内や畑の仕事についていろいろお教えいたしますよ。」

二人が夕暮の庭園に戻ってくると、伯爵は指を立てて威す仕種をした。「こちらへどうぞ、フォン・クライストさん。ヘルタには夕食の仕度をさせましょう。」

天気と気分がよかったら、農場で“仕事の真似事でもしてよろしかろうか”との客の願を彼は快く容れてやった。

「やっぱり娘は家畜や納屋を自慢げにお見せしたのですね、思ったとおりでした。あの子は実質的で身体を使う事には際限なく打込む質でしてね。構わないでしょう！ちゃんとした主婦であるには女主人と侍女の役割を共に果せなければなりませんのですからね。嘗ては心配したものです、あの子がここの穏やかな空気に慣れてしまって、風雨に耐えきらずにガラス箱の中で冬を越す贅沢な草花にでもなるのではないかと。今では役に立ちすぎるくらいで雑草みたいに思えることもあります。或はこういうのが、自然に親しんで生きようという最新流行のルソー流とでもいうのですかね？私自身は所詮極付の古風ですが。これとても、私が、今日では専ら非難・叱責的になっているあの貴族趣味時代の申子だということを考慮していただければ、まあ無理からぬと思って下さるでしょうが。」

作家は、といっても未だしかるべき仕事もしていないで、あれやこれやの図案を基に自分の鑿を試していたにすぎなかったのも、そう呼ばれることはありえなかったのだが、好意のこもった返答をしようと言葉をさがした。彼が伝えようと思ったのは、ロココ芸術が才気と音楽性に富んでいると思えること、と

りわけ、崇拜してやまないフリードリヒ大王が“無憂宮”を軽妙で踊るが如きこの様式で建立し、威厳に溢れた彼の気質に最も相応しかったのは一番晴れやかなロココ様式だと実証してくれたからだ、ということであった。その表現には幾分とってつけたような響があったが、伯爵は余計なところは故意に聞流したかのように、頷いて同意を示した。ブロッケスは無口になり、打解けない様子をしていて、さっき若い二人が同年輩の彼をおいて自分達だけで行ってしまったことが、彼の心を傷つけたようであった。思慮深くて、知識も豊かな人だったから、伯爵と二人で話していた時は溢れるように彼の口をついて出たように、新しい知識や人生観を語ることは勿論出来たのである。

快適に余韻を残しながら日は暮れていった。ぼたりぼたりと溶ける蠟燭の光のもとで彼らは夕食をたべた。夕陽はテラス越に茂みの中に沈んでいった。今や緑黒のかたまりとなって広がっている庭から、列をなした蚊が食堂に踊込んできて、高い弓張窓のところに集ってぶんぶんないていた。二人が辞去し、黄銅色の月のもと、微光を放つ霧の中を露草を踏んで町へと帰った時には、消えそうになる蠟燭の炎のまわりを蛾が数匹よろめくように飛んでいた。

翌週クライストは種々の発見をし、彼の心は力づくで開かれていった。彼は、長い間不気嫌かつ優柔不断に半病み熱に冒されて、腐朽しかかった港に臥していたのが、やっと自分の船の帆を脹らませ、竜骨を急激に外洋へと押し出し、半予知しながら未だ見たこともない不思議な国へと自分を導いてくれる強風に恵まれた、憧憬に燃える冒険家に似ていた。或はもう一つ譬えてみれば、激しい欲望に燃立ち、震動し破壊しながら、創造の意気に溢れんばかりに、その真赤な溶岩で地殻を破碎しようとしている強靱な火山に似ていた。彼の心は興奮し、一気にその熱情を蕩尽してしまおうと欲していた。九月の末と十月初めの日々を、彼はヴェルツブルクとファイツヘヒハイムで交互に過した。ゆらゆら燃える情熱が彼を東へ西へと引張ったのだった。彼にはもう自分が狩人なのかそれとも獲物なのか殆ど解らなかつた。とにかく彼は超俗と世俗とを廻る心の動揺に苦しみ悩んだのである！

友人ブロッケスとはさしたる理由もなしに別れた。夫々が各々の道を進んだのである。

初めのうちクライストが農場とファイツヘヒハイムの城を訪問するのは、一定の間隔をおいていたし、前もって知らされていた。後には彼は、衝動と錯乱した心の赴くまゝに、いきなり、しかもなにごしかのそれらしい理由もなしにそこに姿を見せるようになった。

ヘルタは彼を友達のように迎えていた。彼女には兄弟・姉妹がなかったので、彼女の心の中では先ず無邪気な友情、彼女の自我に対するしっかりした男の子としての相手を求める気持が活発だったようである。

けれどもクライストの方は、こんな関係は妄想にすぎないか、或は愚しいとはいわないまでも無法な試行でしかありえないと最初から思っていた。

彼女は醒めた感性と世事に熱中する気性の持主で、その起居振舞には遠慮がなく、それでいて人の心をそそる献身的なところがあった。彼は時として、彼女は彼を弄んで楽しんでいるのだ、彼を軛に縛付け、自分のそばにおいてその魂と肉体、望と夢、気紛と戯心の虜に、彼女という大地を栖にし、不可思議な光を放ちながら密に彼女と同盟している動物や植物の虜にしようとしているのだ、と思うことがあった。しかし彼は、ほんの数日間ヘルタと会わずに過ぎ、自己嫌悪と男らしく冷静な自由への気力とから生じる閃光で、自分の意識を覆っている暗雲を透きとおして、公正に鋭く諸々のことを観察してみると、彼女が何らの意図も見栄もなしに振舞っていること、彼女の方は天真爛漫にそこにて花を咲かせているだけなのに、彼の方が、紅い花にひかれる蝶さながらその花の輪にひきこまれ、我を忘れて狼狽し、恐しく息ずきながら気持を掻乱しているのだ、ということ認めないわけにはいかなかったのである。それにしても彼女は変らなかつた。彼女の方が彼を、或は二人を結びつけようとする運命を避けるようにすればよかつたのだろうか？彼女は紛もなく大人であつたし — 彼女は平静だつた — 彼は狼狽し半狂乱の状態だつたのだから。

彼はこの一件に終止符を打って逃出すか、或は運命を解し、それを肯定してイヴが差出すリングをたべるかしなければならなかつた。どっちつかずのまゝ苦悩に身を磨滅しているわけにはいかなかつた。それに亦、ヘルタのそばにいらがために百姓仕事を手伝うというのも、男として滑稽だと彼には思われた。百姓仕事については殆ど解らなかつたし、無器用に振舞うこともよくあつたので、彼は作男や農婦の前に出るのが恥ずかしかつた。家畜小屋に入って自分なりに餌をやり水を飲ませてみたり、熊手やフォークを手にとってみたり、干草を積んだ荷車の縛付棒を引いてみたこともあつたが、ちゃんとしたやり方も知らなければ力もなく、また慣れてもいないでただ気儘にやっているだけなので、それは暇にまかせての気散じ、族長の生活、自然に即した暮しへの没頭といった趣だつた。

ヘルタは自分の力が及ぶ範囲を出なかつた。彼女は自分が習い覚えなかつたこと、自分の心身が適わないこと、手伝の枠を越えることは何もしなかつた。

彼女は一貫して自然に振舞っていた。彼が不慣れなまゝ手を出したことを不様な結果にしか終らせえないのは、いかにも彼らしくないと気付いて、それから彼女は彼がすることの何もかもを一つの気分転換、休暇中の気紛として冗談に受止めようと努めた。彼女は彼をもっと易しい仕事へ連出し、放牧場の牝牛飼のところや山腹の山羊放牧場、更には刈田で飼っている鶯鳥のところなどに案内した。これらの仕事を彼女は散歩がてら彼に教えるという体裁にしたので、彼は満足したし、曾ては明るく素晴らしいという印象でしか見ていなかった農民の生活が、実際には労苦と忍耐と辛酸とに充ちたものだ、ということに目を開かれもしたのである。こうして彼は、大地には茨と棘とがあつて、苛酷な労働を経て初めて快適にも爽り豊かにもなるのだということを知つたのだつた。彼は自分自身に対しても他人に対しても、自己の生き様を正当化するに足る何らの行為も、たとえそれが日常茶飯風の英雄的行為であれ、秀でたこと、有為なことは何も示しえないことをとても悲しいと思つた。自らの存在という穀倉に取入れる何らの収穫物もなかつたことを、自身の能力という肥沃な畑に何らの作物も育てていなかったことを。

一度彼はヘルタと果樹園でリングとナシを摘んだことがあつた。伯爵もあとから加わつた。というのも、こういう祝福に満ちた仕事は彼の心に適つたからである。実際彼は、人を楽しませてくれる果樹に一年中注意を怠らなかつたのである。入念に手入れをし、樹皮を撫で、蔓延つた枝を剪定し、樹冠をすかして陽光がよく透るようにしてやり、根元の土を軟かく解し、肥料をやつたり小さな幹に接木したりということに精出してきたのだつた。そういうわけで彼は、果物の味や色艶を愛情細やかに語ることも出来たし、冬期の貯蔵とか保存の仕方にもとても通じていた。

クライストは以前にも時折この老人と果樹園に来て、彼が詳細に甲斐々々しく観察結果を話すのに幾分不承々々ではあつたが耳を傾けたことがあつた。この果樹園の輪郭とよく整理された様がいかに敬虔な感じなのが彼には退屈だつた。格子組にされた枝の下にくると牢屋にいるような気がした。彼は出来ることなら、権木と樹木と木々の梢が蓬髪のように入乱れ纏合つていたり嵐に合つて引裂かれている、或は雑草、羊齒類、地衣類、繁、獸類が蔓延り絡合つて、一匹の人を絞殺す生きた怪物になっている、そんな原生林の中にヘルタと共に入つていきたかつた。しかし、そんなことは野蛮人の氣違ひみた欲望だつたのであり、彼は所詮文明人であつた。

葡萄の丘からマイン河に向つて広がっている果樹園は、銀色の朝の光を浴び

て隈なく輝いていた。割れたツヴェツチュゲの甘酸っぱい果汁の匂が漂っていた。大群の蜜蜂がもう果肉にとまって、割目から滴る果汁を腹一杯に吸い、まるで戦勝のあとの宴に酔ったみたいによたよたしていた。

彼等が互に手を差出して挨拶を交した時、ヘルタは朗らかに無邪気に笑った。「素晴らしい朝ですね！せっせと働かなくては。父は、私達が今日中にこの列の熟れたリンゴとナシを収穫してしまうよう望んでいます。黄玉もそろそろいいようですし。ところで、お城での一夜はいかがでしたか？」

「あゝ — とてもよく眠れました。色々慣れないことはありましたが。泡立つような石膏細工を施した天井の高い部屋、波打つ総鬘の下からいくつもの顔がじっと見つめている何枚もの巨大な油絵、青白くなった絹の絨毯など — 私はなお暫くの間おきて耳を澄ましていました。何かが私を吸込もうとしているみたいでした — 何か不思議な、神秘的なものが — といっても悪意のあるものではありませんでしたが……」

ヘルタは微笑んだ、「私達のところには家霊がいるのかもしれませんが……」

「それならきっと善い霊でしょうね、悪霊は人間の心を栖にするのであって、お城の片隈とか木組の中ではありませんから。それにしても今日はよい天気ですね！」、と応えながら彼はその手で暗澹たる想念を追払おうとするかのような仕種をした。

間もなく枝に梯子が立掛けられた。浅い柳細工の籠と籐の編籠が円やかな果実を待っていた。支柱で支えられて、たわわに実ったリンゴの木の下の方の枝は、厳かにかつ心を傾けて、殆ど実がなくなるまで摘取られた。

ヘルタは慎重に葉柄を振って果実を掬いだ。助手クライストは忠実に彼女に倣い、二人は果汁に充ちた玉のような実を競合って籠に入れていった。彼らは背を申し身を屈め、何度も相接しながら額と頬の汗を拭った。そんな時二人は顔を赤らめながら黙っていた。下の枝を摘んでしまうと、彼らは梯子の横木を伝いながら、ずんずんと上の方のきらきら光っている梢の実へと進んでいった。

ヘルタが片側を摘むとクライストが反対側を摘んだ。干涸びた枝がぼきっと折れ、樹皮が弾け、黄色い葉が髪の毛に貼付いた。

「競争しましょう！」ヘルタが叫んだ。

クライストは急ぐあまりいくつかのリンゴをひどくぞんざいに引ちぎったり、慌てて掴み損ねて草の上に落したりした。彼が先に終って、落したリンゴを拾集めている時、少女は相変らず枝をあちこち攀上っていた。彼はふざけて彼女が使っていた梯子を外した。



「さあこれであなたは、否でも応でもそのブランコの虜になったのです — 身代金を払わなければ自由になれませんよ。」

彼女は怒ってみたり、梯子をせがんでみたりしたが無駄だった。「身代金を払えですって!?! 何を払えばいいんです!?!」

遂に彼はまた梯子を掛けてやった。

「あっちを向いて下さい、フォン・クライストさん。スカートが引掛ってるみたいですから」、彼女は命じるように言った。

ヘルタが二番目の横木まで下りてきた時、お供の彼は突然振向いて彼女をわが身に引寄せた。彼は彼女の息を呑込み、その肌の温みを感じた。彼女の肌と髪が彼を痺れさせた — それから彼は彼女を地面に放り投げた、まるで略奪品でも投げるように荒っぽく。

彼女は微かに呻き、血が滲む程ぎゅっと唇を嚙締めた。彼は吃驚して彼女を見つめていた。

「すまなかった、僕は気が変になっていたんだ」、と呟れた声で言って、彼は彼女を助起そうとした、「痛かった?」

彼女は応えずに立上ると、軽蔑するような仕種で彼の手を撥付けた。それから何もなかったかの如く、すぐ近くのリンゴの枝から熟れて丸味のある実を摘始めた。その顔はほっそりとして依怙地になっているようだった。クライストは仕置をされた男児のように恥じて傍に立っていた。彼は自分の行為に説明を加えたくはなかった。会釈して別を告げようと思ったが、丁度その時伯爵が斜面を上って来て遠くからもう手を振っていた。ヘルタは父に気付かないふりをして仕事に打込んでいた。それで男性二人だけが話をすることになった。クライストは暗澹たる気持になり屈辱を感じていた。が彼は何も気付かれないようにした。全く唐突に彼は訝る伯爵に別を告げた。午後には彼は当もなく町をぶらついてた。

抑彼は婚約者ヴィルヘルミーネに手紙を書くつもりだった。実際に書始めたのだった。ペンは紙の上を滑り、情熱的というより頑で教訓的な不断の彼の手紙には見られない、侮蔑と愛情が入雑り幸福に目が眩んで支離滅裂になった奇妙で情の細やかな言葉を書いていた。やがてうんざりし気力も萎えた彼は、中断し、文字までが揺れているその手紙を引裂き往來に飛出したのだった。橋のたもとで彼は、小市民達が一杯やりながらやあやあわいわい楽しんでいるワイン酒場に立寄った。彼はグラスをぐっと飲干したがその様子は、ワインを嘗めるように飲み白パンをかじっている隣席の連中にはとても異様にまた胡散臭く

映った。次には彼は突然立上がり、テーブルを押遣り、代金を投げると挨拶もせずになりりん鳴っているドアを後手にしめて出ていった。

外では十月の太陽が旧メイン橋の緑に苔生した貝石灰の上できらきら輝いていた。ハインリヒ・フォン・クライストは欄干に身を屈め、頭を水の息吹で冷した。波が寄せてぶつかり合って白い泡をとばしていた。橋台がそれに逆い、流が石の橋桁を、呆然と思に沈んでいる男の全感覚をぐいぐい引いていた。彼は眩暈に襲われたが、それは一種の陶醉であった。彼の自我意識が消え、彼は意志をなくし魂を奪われたみたいだった。聖キーリアンとふっくらした衣服を纏って崇高な姿で橋に飾られているフランケン<sup>1</sup>の聖者達の石像 — それらが生気を帯びて彼の周囲を踊りだした。彼の空想は欣喜雀躍として大地と大気と水に結ばれた。彼は万有の中に注込まれ、万物が彼を覆った。彼は身も心も愛する人と結ばれた、と思った。

威風堂々とメイン河畔に築かれたヴェルツブルクの町は、いくつもの円蓋と尖塔とを緑青をふかせて燃上がらせていた。マリーエンブルクが迫ってくるようだった。この要塞が彼の勇気と反抗心を喚醒した。彼は白日夢から身を引離れた。正気が体に漲ってきた。

そうだったのだ！この上なく甘美な果実に手を伸して摘んでよかったのだ。主人のように振舞っている人の創造主に、闇から光を創造する者になろうと彼は思った。彼は自己を信じ自分の使命を信じた — この日この場で！勿論彼は未だ内実と形態を具えた何物も創造していなかった、未だに原始の霧の中を回っていて、成ろうとしている一つの天体にすぎなかった。だが彼は今や感知した、核は既にあるが、把握は出来ないが正に成ろうとしているものが自分の中に生きていることを。

創造主になるんだ、自ら統べる者に、そして自分自身を克服するんだ！

ハインリヒ・フォン・クライストは立上がった。突如として彼ははつきり自覚したのだった。彼は自己に対峙し、自分の実体を測り吟味した。彼が生まれたのはこの時だった。これまでは彼は一つの希望にすぎなかったが、今後は創造する者以外の何者でもあるまいと思った。彼より前には誰も成しえなかったような仕事をしようと思った、自分の心の内部にある言葉に肉付し、影には実体を与えて。その後は自分の新しい世界を唯一人の女性に捧げるつもりだった — かけがえのない永遠の恋人に、そうすればもう半端でも支離滅裂でもない完全な人間になれるだろうと思って — 何故なら彼、男子たる彼は、自分を完全な人間、古い神話によると男にして女でもあったというアダム<sup>2</sup>にしてくれる分

身、女性の分身、彼の第二の自我を必要としていたからである。

ハインリヒ・フォン・クライストはヴェルツブルク最後の日々を一種の陶醉状態で過した。彼は自分の本性の何たるかをやっと認識したと思った。彼の憧憬の念は炎々と燃上がり、処女作の執筆にとりかかった。

暫くして再びファイツヘヒハイムに現れた時、彼は寛いでいて狼狽する様子もなかった。ヘルタは彼に手を差出した。

「久し振ですね、フォン・クライストさん」

彼女の声はいくぶん皮肉っぽく響いた。彼は肩を窄めたが、その顔には自負に満ちた光があった、「先だつては失礼しました、気持を抑えきれないで。」

二人は初めて会った時と同じ様に連立って庭園を散歩した。作家が少女に言った：

「ヘルタ、貴方が一廉の男性でないについて行かないということは解ってます。もしかしたら明日にでも私は勝者になるでしょう — 今日は未だ戦の最中にいますが。」

ヘルタは素気無く応えた、「明日？明日どうなるですって？ — それに — 貴方は婚約中ですよ、フォン・クライストさん……」

「そう、僕は婚約している。でもあれは間違だった。君を愛している、ヘルタ。ヴィルヘルミーネがそれで不幸になることはないだろう。今まで僕は教師気取で彼女を苦しめてきたのだから……僕は彼女を偶像に仕立て上げようとしていたのだ — でも今は……」

「でも今は？」、少女は殆ど挑発するように尋ねた。

「君を愛している、ヘルタ — それだけだ……」

ヘルタは頭を反らせた。彼女は苦味のある匂を発散している櫟の生垣を指で摩った。二人は相手を見つめようとしないうで、黙ったまゝ並んで歩いていた。そのうちに庭の中央にある石像のスフィンクスのところにやってきた。二人は思わず知らず立止った。ヘルタは屈んで道の傍の小石を一つ擲むと、物を毀して喜ぶ幼児のように、その小石で石像の肩から一塊の苔を叩いて落した。

「お気を悪くなさらないで、フォン・クライストさん、貴方を愛しているかどうかわからないのです — 愛は炎だと思っていました。でも私は燃えないのです — それだけです……」

彼女は先程作家が言った言葉を笥のように繰返した。クライストは凍りついたような微笑を浮かべて会釈し、「どうも」と言ったきりだった。突如として彼は陰の世界、喜も悲もない、希望と失望の彼方に立っていた。彼はヘルタに別

を告げて、ヴェルツブルクに帰っていった。

十月も末になり、葡萄摘が始っていた。葡萄の房が熟れて芳醇な香を放ちながら莖にぶら下り、その粒は玉虫色に光っていた。

クライストは魔法を使う葡萄摘人さながらに、自分が描いた絵と夢という葡萄の房を摘取り、自らの文学という葡萄絞器の中に入れて潰していた。彼は酔っているようでもあり、何かに憑かれているようでもあった。この頃彼の戯曲の登場人物が続々とその姿を固めていったのである：愛するが故の憎しみに駆られ、自らを寸々に引裂いた女丈夫ペンテズィレーア、自分のことを殆ど気にもとめてくれない男のとりこになってしまった、慎しく献身的なハイルブロンンのケートヒェンなど。それでも時には彼は恍惚状態から醒めて、ぎくりとすることがあった。不可解な彼の心が生出したこれらの人物は、彼が自分の栄誉をその足元に投出そうとしたのに、それを撥付けた少女ヘルタの面影を残していないだろうか？ だがそれがどうだったというのか!？ 彼が永遠の恋人と思った女性が、ヘルタという名前であったにせよ、或は知らない聞いたこともない名前であったにせよ、そんなことは結局どうでもよいことだったのだ。

クライストはヴェルツブルクを去る前に、もう一度ケッペレへの坂道を上っていった。巨匠バルタザール・ノイマンはお伽話風のこの巡礼聖堂を、河と隆々たるスレート屋根や渦巻模様の葱花ドームが点在する町を見下せる、マイン河岸の程好い斜面に包み隠すようにして建てていた。午後の陽光が鈴懸の樹冠から漏れ、地面に落ちた葉は靴裏でかさかさ音をたてた。あちこちの庭で踏潰されたスモモとナシの甘酸っぱい匂がしていた。

行人はひっそりした聖殿に入っていた。蠟燭の蜜蠟と香煙の匂がした。窓越に斜に光が差込んで、祭壇のところで交錯して黄金の木組のように見えた。祭壇の壁龕には弦月の上に立つ聖母マリアの像があって、彼女の足は地球にとぐるを巻いている年経た蛇の頭を踏拉いていた。聖母の頭は星の輪で飾られ、身体は火焰に包まれていた。聖母は微笑を浮かべ、御子を胸にしっかりと抱いていた。聖母像の前では銀色の燭台の釣籠が、まるで地球の自転につれて幽かに動いているかのように揺れていた。石膏細工を施した大理石が輝いていて、香で煤けた絵が靈妙に微光を放っていた。聖殿の中には天体の奏でる音楽があり、光と陰が交す対話があった。

作家は椅子に坐り、耳を澄ませた。やがて彼は瞑想に耽り、いつしか暖かい大洋に漂っているみたいに満ち足りた気分になった。再び外に出た時、彼の心は確信に充ち、安らぎで一杯だった。

狭い生垣道まできて彼は町へ帰ろうと思った。けれども何時の間にか蒸暑く  
なっていて、不意の嵐になりそうだった。マリーエンブルクに雲が簇がった。  
身を寄せるべき家にもいけないうちに雷雨が起った。黄色い稲妻が利鎌のよ  
うに葡萄の丘を掠め、刈田が雨の下でざわざわ鳴った。しかし秋の狼藉はさつと  
過ぎて、早くも夕陽の光輪がメイン河の谷間にきらきらと光を投げていた。

クライストは一本の樺の木陰に身を寄せてこの光景をじっと見ていた。それ  
はバロック様式の教会があり城がある地方での彼の滞在を、正しく劇的に締括  
るものだった。明日にもヴェルツブルクを去って、北へ、砂地と湖と広大な松  
林が明るいフランケンという南とは別の、ずっと苛酷な生活規範の必要性を告  
げているわがマルク・ブランデンブルクへ旅立とう、と彼は思った。クライス  
トはフランケン地方を、峻厳な風土の自分の故郷に対峙するものとしてこの南  
の国を好きになっていた。しかし今再び冷厳な北の自然の中に身を沈めていく  
ことが誇らしくもあり嬉しくもあった。そこで広大な平野と黙した大河に揉ま  
れながら苦闘し創造すること、それは人生という弓の弦を一層強く引くことを  
意味していた。

「私は私の夢が描いた楽園から私を追払ってくれる運命の呼声に耳を傾けな  
ければならないのだ。この運命こそ、私を駆る炎の剣を持った天使なのだから、  
現世と来世を征服するにせよ—或は滅びゆくにせよ。」

\* \* \* \* \*

本書の出版に関しては以下の方々には次の点で謝意を表しておきたい  
出版社ヘルダー：

表題「Kleist in Würzburg」の使用許可

バムベルクのゲオルク・ベック博士：

後記の寄稿

メインフランケン美術館：

ヴェルツブルク市の風景画資料提供

ベルリンのドイツ国立図書館：

1808年9月30日付でハインリヒ・フォン・クライストが姉ウルリケに宛てた  
手紙の複写。この手紙は表裏別々に複写、掲載した。

ハインリヒ・フォン・クライストはヴェルツブルク滞在中、1800年9月9日  
から10月11日にかけて5通の手紙を書いた。これらの手紙は、例えばこの町  
のことを記述した有名な1800年10月11日付の手紙がドイツ国立図書館の戦  
失品になっているなど、その行方が不明になっている模様である。

1800年という年に最も近く、我々が手にすることが出来た文書は、上記1808年9月30日付の手紙であった。

\* \* \* \* \*

著者から1982年2月26日付で訳者に寄せられた手紙の抄訳：

……日独両国間には、個人的並に文化的な友好関係が伝統として存在しています。日本人とドイツ人とは、その考え方におきましても性格におきましても、随分共通した面があると思います（我々両国民はこの友愛の精神を深め、その絆を強めるべきですね！）。そういうわけで、ドイツ文学者の貴方が、私の『Kleist in Würzburg』を日本語に翻訳し、この短篇を公にして下さることは、私にとっては喜であり榮譽でもあります。

この作品には確かに何某かの“ドイツ気質”が含まれています。更に私達の歴史を形成してきた北と南という二重の精神もそれなりに — ハインリヒ・フォン・クライストなる人物とそのヴェルツブルク体験という両極的な緊張を通じて。……

私達両国民がお互理解しようということが、愈々もって宿命的になっております。私の短篇が小さな贈物としてこの点で寄与出来ましたなら嬉しいですし、貴方とお国の人々に心から感謝の念を捧げるものであります。

Friedrich Deml について：

1901年2月15日 Ebrach (Steigerwald) に生まれる。Scheßlitz で幼年時代を過し、Bamberg でギムナジウムを、更に Regensburg を経て、München, Wien で大学生活を送る。Rheinland, Oberschlesien で教師。1938年 Frankenland に帰り Bamberg の Mädchenoberschule に勤務。戦時中はノルウェーで従軍記者として過す。戦後 Bamberg に帰ってギムナジウムの教師 (1964年 Oberstudienrat として退職)、教育大学での講師の傍ら、演劇批評、創作に従事。1932年に処女詩集 „Sprache der Dinge“, 1935年第2詩集 „Regensburg, die steinerne Sage“ を世にとう。Heimischer Vertreter des Bamberger Dichterkreises として、Otto Gmelin, Hans Brandenburg, Stefan Andres, Ludwig Friedrich Barthel, Bruno Brehm u.a. と出合い Tafelrunde を形成。1974年の詩集 „Im Kern der Atome“ にいたるまで、„Rupertwinkel“ (Erzählungen), „Das irdische Abenteuer“ (Novellen), „Der Maler und das Meer“ (Novelle), „Das Antlitz der Sibylle“ (Erzählungen), „Sonnenmaske“ (Abenteurer-Roman), „Kleist in Würzburg“ (Novelle), „Sol invictus“ (Roman) 等をはじめ多くの Gedicht, Prosa を発表。なお Am Born der Weltliteratur (Lesestoffe für Höhere Schule und zum Privatgebrauch), Reihe A: Deutsche Sprache (15 Hefte) 中の Heft 13(Georg Beck 編) には Max Mell, Hans Carossa, Reinhold Schneider, Gertrud von Le Fort, Ernst Wiechert と並んで Friedrich Deml が加えられている。